

## 谷隆一郎著『アウグスティヌスの哲学』

## 司会報告

中川 純 男

書評会という形は、中世哲学会としてはおそらくはじめての試みであろう。公刊された一冊の書物について、あらかじめ特定の問題項目を用意することなく討論を行うことは、あるいは論点を鮮明にすることなく時間切れに終わるのではないかと危惧された。しかし、提題を担当された荻野弘之氏の周到な準備により、そして今回取り上げた『アウグスティヌスの哲学』の全体を貫く谷隆一郎氏の透徹した思索により、さまざまな視点から提起された問題は、自ずと一つの方向を指し示すものとなっているように思われる。とりわけ、問題となったのは魂の「自己超出」という視点である。これは谷氏にとって、たんにわれわれから見たアウグスティヌスの思索であるにとどまらない。「われわれ」とアウグスティヌスが会う場となる、いわば運動である。このような実存的ダイナミズムが谷氏の著作をきわめて魅力的なものとしていることは疑いえない。しかしながら、われわれはテキストや歴史性を媒介とすることなく、アウグスティヌスと出会うことはできない。提起された問題は、われわれとアウグスティヌスとの、認めざるをえない隔たりを通して、なお実存的な出会いの場は可能なのか、可能であるとしてもそのとき、テキストや歴史性はどのように評価されるべきなのかという点に向けられていたと思われる。

## 基調質問

## 『三位一体論』と聖書解釈の問題

荻野 弘之

谷氏の著作に関する私見の概要はすでに書評（本誌 37 号）に述べたので繰り返さない。私の質問の要旨は、著者の「存在論的ダイナミズム」という絶えざる自己超出の構造にとって、聖書解釈がいかなる機能を果たしているのか、という点に絞られる。一例を挙げれば、周知のようにアウグスティヌスは「頭に蔽いを被る」使徒の命令（1 コリ 11, 5-7）を創世記の墮罪記事と結びつける独自の解釈を通じて、罪への転

落の三段階を魂の構造と相即する過程として論じていく (XII. 7. 9-13. 21) のだが、こうした (教父のとも呼ぶ) 独特の解釈の技法が、探究のダイナミズムを支えている様は随所に窺うことができよう。しかも『三位一体論』における引用と解釈は、洗練された修辭的文体をもった『告白』の場合と比較して更に一層錯綜を極めているように思われるが、このような解釈学的契機をいかに評価するかが、本書では未だ主題化されていない。

また著者は「聖靈の働きについては、何ら主題的に論じることができなかつた」(p. 427) と述懐しているが、事実「聖靈」という語は、ロマ書 5. 5 その他の引用 (4回) を除けば、本文中にはわずか一回しか登場しない (p. 377, ただし索引に記載漏れ)。聖靈論の課題とは、それがペルソナの一つとして三位一体論全体にとって不可欠であるという形式的な問題にとどまらず、聖書解釈を動因とする探究を可能ならしめる条件に関わるのではないか。つまり『三位一体論』全巻に溢れる膨大な聖句引用を、単なる権威粉飾や我田引水ではなく、探究に不可欠の契機とするならば、そのための方法論的な評価がなされなければなるまい。この解釈学的視点なくしては、谷氏の言う連続的創造 (再創造) あるいは絶えざる自己超出といった論点も、何か再び (アウグスティヌス自身が挫折し訣別したはずの) 古くて新しいプラトン主義へと転化する可能性を宿しているように思われてならないからである。

## 意見

神 崎 繁

教父学もそのうちに含まれる古典研究の方法全般において、テキストの解釈は不可避の手続きであるが、しかしそれにも、アレクサンドリアの註釈の伝統以来の区別で言うと、*exegesis* と *paraphrasis* の二つがあるように思われる\*。これは、問題となる本文の (必ずしも逐語的なものである必要はないが) 引用に続いて、解釈者の立場からの議論の要約と説明がなされる前者と、最初から解釈者の要約的言い換えによって議論が進行する後者との違いである。これらの境界は、場合によって不分明であり、とりわけ翻訳という手続きを更に経なければならぬわれわれにおいて、この違いは一層不明確となる要素を含むであろう。だが、それらを勘案した上でも、「解釈者は、

【解釈対象】その人が完全無欠の無謬であるとの論証を、あたかもその学派の一員であるかのように、目指すべきではない」(シンプリキオス)\*\*という、前者の方法的態度に抛りたいと願う筆者から見ると、谷氏が本書で採用される方法には、後者に特有の問題点が含まれるように思われる(このような paraphrasis の典型として念頭にあるのは、レオ・シュトラウスとその一派の古典解釈である)。

その例を一つに絞れば、著者の多用される「確実性」の語について、果たしてそれがアウグスティヌスにおける certum あるいは certus を、何かが確実であるとか、それについて自分は確実であるというように、言い換えられるものか、問わざるを得ないことである。そこにおける「確実性」とは、もしそれがデカルト以来の近世的意味連関から仮に(著者も多分そう主張されるかもしれないが)自由だとして、なお一体何を意味するのであろうか。筆者のささやかな懐疑論研究は、ラテン語の certum/incertum が、キケロにおいて(従って彼を介して、アウグスティヌスにおいても)ギリシア語の *δῆλον/ἀδῆλον* の訳語であるかぎり、「確実/不確実」ではなく、むしろ「分明/不分明」であること、つまり古代の懐疑論を近代のそれから分かつものを解明する exegesis のつもりであった。paraphrasis は、その点を不問にしたまま、アウグスティヌスを自らの言葉で語るという幸福な一体感の足許に、かえって論者自身の忌避される、近代的通念の忍び寄るのを許しているのではないかと危惧するのである。

#### 註

\* この二つの区別に関しては、A. C. Lloyd, *The Anatomy of Neoplatonism* (1990), pp. 3-4 に、また、特に前者に関して、Jonathan Barnes, *Logic and the Imperial Stoa* (1997), pp. 43-55 に、それぞれ有益な記述がある。より全般的には、P.-L. Donini, 'Testi e commenti, manuali e insegnamento: La forma sistematica e i metodi della filosofia in età postellenistica', W. Haase ed., *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, II-36. 7 (1994), pp. 5027-100 および、C. Moreschini ed., *Esegesi, parafrasi e compilazione in età tardoantica* (1996) を参照。

\*\* 『アリストテレス「範疇論」註解』7. 27-9 この exegesis の態度に関しては、David Sedley, 'Plato's Auctoritas and the Rebirth of the Commentary Tradition', J. Barnes & M. Griffin edd. *Philosophia Togata II* (1997), pp. 110-29 を参照。

## 意見

水落 健治

本書の第二部は、「神の似像」の探求——『三位一体論』に即して——、と題され、ここではアウグスティヌスが『三位一体論』の中で展開した思索が、ほぼその本文に即した形で扱われている。この著作は、周知のごとく、三位一体に関わる聖書の証言を扱った前半部（1～7巻）と、アウグスティヌスがこれらの個所を念頭に置きながら独自の思索を展開した後半部（8～15巻）とに区分されるが、著者は、このような構造を持つ著作を次のような仕方で扱っている。

まず著者は、第二部「序」において、『神の似像』および『神の名』なるものが、われわれの『存在すること』に対して有している微妙な意味合い（p. 170）について言及し、神の似像を知ることが認識者の「存在様式の根本的変容を伴う」こと（p. 171）、神の似像が「存在の似像」であること（p. 172）を指摘する。次いで、この指摘との関連で、「信という端緒を軽蔑する余り、理性への未成熟で転倒した愛によって欺かれている人々」（p. 173）の三種類の誤謬について論ずる（第一節、信という端緒）。そして、これに続く第二節以降では、『三位一体論』前半部の問題は全く論じられることなく、後半部に関する議論が直ちに始まり、「精神—知—愛」、「記憶—知—解—意思」、「感覚の三一性」、「記憶の三一性」等についての議論が展開されて行く。

かかる論述の構造からすると、著者は「信」なるものを、神の似像を知ろうとする者の「存在様式の根本的変容」との関連で捉えているようである。この主張は、その後の論述でも、たとえば「自己超出が取りも直さずある種の自己還帰でもある」（p. 217）などの形で現れ、著者の主張の根本をなしていると考えられる。

だが、このような「認識者を自己超出せしめ、変容させ、自己還帰させて行く三一的思惟」は、中期プラトン派、新プラトン派の思惟とどこが異なるのであろうか。（新プラトン派の思惟、およびオリゲネス以降の教父の思惟の前提に、中期プラトン派の三一的思惟構造が存していたことは、研究者たちの昨今一致して認めるところである。）

したがって、アウグスティヌスの『三位一体論』を、もし勝義な仕方でキリスト教

のものと理解しようとするなら、「信」の問題がもう少し別の角度から見られなければならない。具体的には、『三位一体論』前半部の、著作全体の中での位置づけの問題である。この問題が、同書後半部で展開されるキリスト教独自の主張——「創造と原罪の問題」(pp. 251ff.) 等——との内的連関において取り扱われたなら、『三位一体論』なる著作の意義と独自性がさらに明らかになっていたのではあるまいか。

## 意見

山本 巍

再読して、真っ直ぐな筋 (*intentio recta*) と強靱に躍動する思索の印象を改めて受けた。

何であれ、対象化、固定化、完結化、閉鎖化、に対する批判が徹底して繰り返される。そうした操作を受けると、何であれ一種の「もの」と化すからである。そして「もの」化は「人間の思惟の限界内に措定された」(148頁) 結果であり、虚構に過ぎない。こうして神というもの、自己というものすら退けられる。そして人間が「成りつつ、無限に開かれ超えられる」という、著者年来の思考である「存在論的ダイナミズム」(340頁) が展開される。鮮明な論旨である。一点だけ疑問。「自己還帰という動的なかたち」(306頁) のその都度の「成りつつ」はただ超えられ、背後に打ち捨てられるべきものとすれば、人間の生が無意味となるのではないだろうか。その都度の「成りつつ」は、後先に似たものがない唯一回生起の「こと」として「成ってしまった」との意義を担いうるのではないだろうか(アリストテレスのエンルゲイアを想起したい)。と同時に(それにもかかわらず、なのか、それゆえにか)、人間の「こと」はどこまでも超えられていくべき「成りつつ」であって挫折、敗北でしかないのではなかろうか(著者の164頁に言う「晴朗さ」に共感する)。「生成は存在のため」であるにしても、また「精神の志向的構造」(120頁) が求めるにしても、アウグスティヌスの有名な「神において憩い休む」は些か疑問となるのではないだろうか。それとも「顔と顔を合わせるかの時に」手品の種明かしのように人生の謎が一挙に解消するともいうのだろうか。むしろ逆であろう。

「何らか」という語が多い。言葉になりにくい、ほとんど言葉にならない「何か」

をなお言葉にしようとするのだから、当然とも言えるけれど、それでも使用頻度が気になる。アウグスティヌスということであれば、人間の身体の担う意味の考察を求めたい。今回も散見するが、次作に希望を託すことにする。

## 意見

加藤 武

谷隆一郎の『アウグスティヌスの哲学』は、傑出した力作です。その特色は、ペルリンガー、ツム・ブルン、今道友信らの研究の系列に属し、これをさらに進める強靱な哲学的な思索にあります。しかも「存在論的ダイナミズム」といえる構造をとりだすことをめざして、『告白』と『三位一体論』のとりわけて後半を結び付ける領域を、大胆に切り開かれました。筆者はここにその先駆的な意義を見出すものであり、将来の、大きな困難であるけれどもよろこばしい共同の課題を、われわれに呼びかけられたように思います。

筆者の質問は次の点です。谷さんの狙いは、アウグスティヌスの対話論的な思索をつかみだし、その運動を追跡することにあるのではないのでしょうか。しかしその意図がはたして実現しているのでしょうか。かえって独語論の閉域にいささかとぐろをまいてゆく趣きはないのでしょうか。本書のなかでわけても興味深い問題が提示されるのは、第五章の悪の問題をめぐる箇所です。この箇所は本書の要めのように思われます。それに著者みずから「実のところ、第五章の問題に対する一つの見極めがあってこそ、第一章からの叙述を始め得る」（9頁）とのべておられます。悪と自由の問題を「存在論的要諦」（161頁）としてとらえ、存在論と倫理学を切り離さない姿勢に賛成です。でも悪ははたして「否定性」に留まるのだろうか。ヘーゲルの論理学が否定性を媒介として進行する姿を思い浮かべるとしたら、大きな誤解である、として反論されるでしょう。けれども飲み込みの悪い筆者には、悪すらもむしゃむしゃ飲み込んで行く巨大な図体の怪物の姿が思い浮かぶのです。「その悪しき罪のかたちの何らかの浄化、否定として、かろうじて〈存在のかたち〉が現出してくる」（161頁）といわれ、そのような「超えられるはたらき」が「被超越」（161頁他）と名付けられるあたりは、きわめて迫力のある箇所であるけれども、疑問の雲もうずまくところです。アウ

グスティヌスは悪をたんなる「存在論的な定式」においてとらえたのではない、といわれることに全面的に同意します。同時に経験が「論理化される」だけでなく、「物語られた」経験の言語論的・解釈学的側面がさらに探索されるべきではないかしら。

---

## 意見

片柳 栄一

著者は、アウグスティヌスの思想、殊に彼の「三一神論」の後半部を、著者自身が「存在論的ダイナミズム」と呼ぶ基本的な考えに基づいて読み解こうとして行く。質問は、この「存在論的ダイナミズム」が、アウグスティヌスの思索、ことに「三一神論」の思索の行程を辿るのにどこまでの適合性をもっているかに関わる。「存在論的ダイナミズム」とは、約言すれば「自己超越、自己還帰という動的なかたちこそ、魂・自己の、そして人間・本性の本源の意味」(306頁)であるとする考えであり、「人間の本性とは自らの成立の根底に、或る決定的な自己否定をはらんでいる」(307頁)とする。ところでアウグスティヌスが「三一神論」の後半部でなしている「神の似像」としての人間存在の分析論の核心は、私見によれば第十巻、及び第十四巻の自知をめぐる分析にあると思われる。それは後のデカルトのコギトの分析にも劣らない綿密な深さ（ハイデガーがデカルトを批判したような意味では、「すでに有る」という事態の分析においてより徹底した深さ）を持っている。ともすればこれに対する解釈は平板で静的な対象的な分析に終わりがちなのであるが、谷氏は、第十巻の解釈においても(207-230頁)人間の魂の自己超越的な動的構造を見据えており、その動的構造の指摘はこの書の顕著な功績である。ただ魂の動性をあまりに強調することによって、アウグスティヌスがこの自知の明るみにこめた意義が或る面、見過ごされることになるのではないかと懸念を持つ。つまりアウグスティヌスにとって「神の似像」としてのこの自知の明るみは、単に突破され超越されてゆくにすぎないものではなく、人間が人間である限りでの最後のな場であり、永遠なるものに人間がそこで出会う究極の場として見いだされているように思われ、現代の哲学的思索もなおそこから学ぶべきものを多く持っているように思うのであるが、どうであろうか。

---